

「良識」への問い

— 児童文学による「子ども」への接近 —

本田 和子

子どもたちが「ままごと」をしている。テーブルの上にお皿を並べ、カップを並べた。お客さまがすわる。

「どうぞ」「コーヒードす」

「お客さまはカップをつまみ上げ、すぐテーブルの上にもどす。はずみにカップがひっくり返った。それを見て、主婦役の子どもが立ちあがる。玩具のポットに水を満たすために、水道に近よる。その時、保育者のおだやかな声がかかった。

「お水は、お外で使いましうね」

主婦役の子どもは黙って保育者を見上げ、からのポットを見つめ、瞬時、立ちすくんでいる。やがて、からのポットを持ったまま、ままごとコーナーに戻っていった。

子どもたちが、金網の塀によじのぼる。目をキラキラさせて、笑声を立てながら、嬉々としている。

「ワイー」一番上までのぼった子どもが、向こう側に首

を出して叫ぶ。塀のてっぺんから見おろされるあき地は、いつも金網ごしにのぞく空間とはちがった新しい世界である。

保育者がかけよってきた。

「おかしいわ。おさるさんみたい。さあさあ、おさるさんたち、ジャングルのおうちへ帰りますよ」

子どもたちはちよっとバツ悪げに、金網をおりた。

子どもたちが思いついた「一番ステキなこと」は、こう

して、保育者の良識によっておだやかに変更させられる。

子どもたちは、表面きってさからうことはしないままに、何となく遊び方を変えるけれど、「おもしろさが半減したこと」を感じている。

水を使わない「ままごと」は、単調な食器いじりに終始するし、ジャングルへ移行したおさるさんの群れは、いつの間にか一人もいなくなっている。

保育者の「良識」とは一体、何なのだろうか。

子どもたちを安全に、大過なく過ごせるために、最低限必要なこと、という答えが用意されているかもしれない。

そして、子どもだって生活の秩序を学んでいかねばならない、という「けじめ論」が、その後に続くかもしれない。そして、これは、おとなの側から考えれば一応もつとも無理なのである。

しかし、子どもにとって、おとなのたてとするこれら「良識」は、一体、どのような意味をもち、どのように位置づくのだろうか。

子どもたちは、おとなと共通の言葉でそれを告発し、問い直すことをしないけれども、子どもたちなりの表現で、おとなの「良識」を絶えず問い続けているように思われる。

子どもの世界に内接する児童文学者たちは、それらの告発を、作品中の主人公をして大胆に行なわせていることが多い。ここでは、二、三の作品を手がかりとしながら、子どもの側からなされる、おとなが「良識」と信じて疑わなもののへの問いかけに、耳を傾けてみよう。

◆ リンドグレーンの作品から

リンドグレーンの描く子どもの像は、子どもの世界の英雄である。ピッピを代表として、カツレくん、ミオなど、子どもたちの憧れの対象が少なくない。

この主人公たちは、完全に子どもの論理に生きているが、その代表は、何といつても「世界一強い女の子、長靴下のピッピ」であろう。ピッピは、一匹の子ざると馬を家族として一人つきりで「ごたごた荘」に住んでいる。学校へも行かないし、夜になればまくらに足をのせ、頭にふとんをかけて眠る。台所の床一面に小麦粉をのばしてジンジャー・クッキーを五〇〇個も焼いたりする。

小さな女の子が保護者もなしに一人で好き勝手に暮らすことはよくないと、町のおとなたちは、ピッピを養護施設「子どもの家」に入れようとする。ピッピは、迎えにきたおまわりさんを、軽く一蹴するのである。

「わたしは子どもで、これは、わたしの家だわ。だから、ここは『子どもの家』よ。わたしはここにいるんだし、それでたくさんよ」

学校に関しても、ピッピは明解である。

「わたしは、竹たけさんさんの靴くつ（かけ算の九九のこと）なんてものをしらなくたって、九年間、ちゃんとやってきたわ。だから、これからだってやっていけるとおもうわ」

おまわりさんは、何とか説得しようとして言う。このまま大きくなり、「ポルトガルの首都はどこか」と問われて、それを知らないとは恥ずかしいじゃないか、というのである。ピッピはあつさり答える。

「こういつてやるわ。」ポルトガルの首都がどこなのか、そんなに気になるんなら、じかにポルトガルに手紙をだし、きいてみなさいよ」と。

子どもにはおとなの保護が必要であり、教育は不可欠であるという思いこみ方、これは、考えてみれば大変な思いあがりなのではないか。子どもは、子どもとして「りっぱにやっつけていける」ものなのである。

白馬の王子ミオは、現実の世界では薄幸な孤児であった。魔神に導かれて「はるかな国」に運ばれ、おとうさんの王さまにめぐり合って、王子ミオとよばれるようになったのである。

ミオはある日、バラ園で庭番の子どもと一緒にパンケーキをおながはちきれるほど食べ、大笑いしている。そこへ王さまが通りかかる。ミオは、ハツとして不安になる。こんなことをして王さまにしかられないだろうか。しかし、王様は幸せそうに一緒に笑い、自分の喜びは、息子が大笑いしているのを聞くことだと言う。

ミオは、今こそ、本当の幸福が、自分の上に訪れていることに気づく。それは、自分たちの「一番ステキなこと」が、決して「してはならないこと」にならない国に、自分はいるのだという喜びなのである。

ピッピの物語は、そのあまりの奔放さと型やぶりの主人公のゆえに、最初は、あちこちの出版社で出版をことわられたという。おとなのいわゆる「良識」は、それに対する大胆不敵な挑戦者を、こころよしとはしなかったのである。しかし、この本が出版されるやいなや、ピッピはスウェーデン中の子どもを夢中にさせ、子どもたちの秘められた願いの実現者として、世界中に支持者を得たのである。

◆山中恒の作品から

山中作品には、既成の秩序に挑戦し、常識的モラルを否定して、自己の世界の確立に全エネルギーを傾注するような子どもが、主人公として登場する。

「とべたら本こ」のカズオは、学校教育を信用せず、両親の愛情にも疑問を投げかけて、「家出」という形で「良識」への反逆を表明する。現実の重要性を口では説きながらも、カズオがただ年齢が少くないというそれだけの理由で、カズオの述べる真実を認めず、おとなの言に左右される教

師の姿が、教育不信の象徴として猫かれるのである。

「ぼくがぼくであること」の秀一は、「あなたのため」

と称して、彼の成績に一喜一憂し、友人との文通にまで目を光らせる母親に、宣戦を布告している。家庭の平和とか親子の愛とかいう言葉のかけにかくされた偽瞞に、我慢ができないのである。

山中作品の子どもたちは、美しいものと当然視されている母性愛や教育者像に、問いを投げかけ、おとなたちの掲げる平和の理念にすら挑戦する。

たとえば、カズオの家に「世界博愛平和教団」の支部長が寄附をもらいにくる場面がある。両親のこぼんだ寄附をカズオは追いかけて行って、百円札一枚という形で意志表示をするにもかかわらず、それが、居酒屋の一杯のコップ酒になっている事実を提示するのである。平和の大切さは、学校でくり返しくり返し教えられていた。そこで、カズオも及ばずながら実行しようとしたのに、これからは「平和だつて気をつけよう」と思わざるを得ない。

子どもたちは、おとなの社会通念に片はしから疑問を投げかけ、善行・美德とされていることすら、往々にして、虚偽と瞞着に満ち満ちていることを、痛烈に指摘しているのである。

◆おとなの「良識」は時として暴力となる

二人の作家の作り出した子ども像を手がかりに、子どもの論理からは問い直され、挑戦さるべきものとして、おとなの「良識」をとらえ直してみた。

ピッピやカズオは、極端な破壊主義者であったり、極端にこちようされた存在ではない。子どもの側から、おとなが「良識」と信じて疑われないことを問い直せば、このような形に表現することができるといっわけである。このくらいの激しさで挑戦しなければ、問いかけ不能なほど、おとなの「良識」とは堅固なものだということになるうか。

おとなと子ども、保育者と幼児の間に形成される「教育」とよばれる人間関係は、時として、おぞましい「力関係」として成立しかねない。「おとなは子どもを指導する責任があり、その成長に責任を負っている」ということは、安易に使われるなら、幼児が自らの生に対して責任を持つべき自律的人間であることを、否定するほどの危険性をはらんでいるのではないか。本質的にはになうべくもない幼児自身の生き方の責任を、おとななるがゆえに負わねばならないとする思いあがり、**「善意の暴力」**ではないかいなか、自らに問い続けることを怠ってはならないであろう。